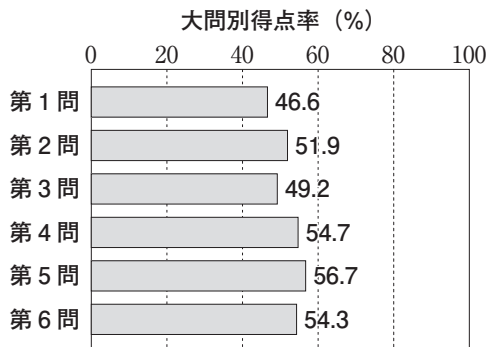
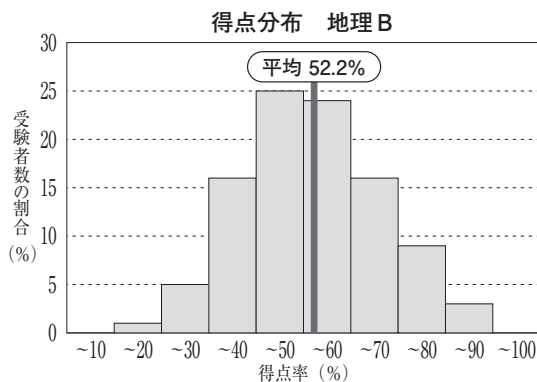


地 理 B

模試の見直しをしっかりと行い、強化すべき点をはっきりさせよう。

I. 全体講評

今回の第3回6月センター試験本番レベル模試の平均点は52.2点であり、前回4月の平均点43.0点を9点以上も上回った。地理学習に本格的に取り組む受験生が増え、その成果が徐々に現れ始めた。しかしながら、今年のセンター試験本試験の平均点62.3点とは未だに10点以上の開きがある。今回得点が伸びた受験生も、油断せずに学習を継続すること。今回正答率の低かった問題は、高校地理で学ばずや専門的な知識を必要とする問題、図表の読み解きに論理的な思考力を必要とする問題である。受験生は間違えた問題をしっかりと見直し、強化すべき点は高校地理の知識なのか、それとも、統計図表を読み解く力なのかをはっきりさせること。その上で、Ⅲ. 学習アドバイスを参考にし、現在の自分に最適な学習計画を立てるようにしたい。



II. 大問別分析

第1問 世界の自然環境と自然災害

正文・誤文の選択問題も、図表問題も、まずは丁寧に読むことから始めよう。

大問全体の平均得点率は46.6%であり、6つの大問中で最も低かった。自然環境の分野は、農業、工業、集落等の他分野を理解する基礎にもなる重要分野なので、もっと得点力を高めたい。問3は、誤答③の選択率が28.2%とやや高かった（正答率は37.6%）。やませのことは知っているにもかかわらず、それが低気圧から吹くと述べている選択肢の矛盾点に気づくことができない受験生が意外に多かった。問6の出来も悪く、誤答②の選択率48.1%が、正答率33.7%を上回った。全ての都市の雨温図を特定しようとせず、ニューヨークの雨温図だけを探したために、②を、冬の冷え込みが厳しい内陸のシカゴのグラフと判断できなかった。こちらの問いも、もう少し丁寧に図を読めば間違えずに済んだはずだ。正文・誤文の選択問題も、図表問題も、まずは丁寧に読むことを心がけたい。

第2問 資源・エネルギーと工業

教科書・図説資料集レベルの、高校生が習得すべき基礎知識を早めに身につけよう。

大問全体の平均得点率は51.9%で、物足りない結果となった。問2の正答率が27.0%と低かったが、2000年より2013年の一次エネルギー自給率の方が低い①と②のグラフをアメリカ合衆国のものと判断した受験生がともに多かった（①、②の選択率はそれぞれ31.2%、39.0%）。近年のアメリカ合衆国のシェール革命が頭に入っていない受験生が意外に多い。問5の正答率も30.6%と低かったが、インドが混合経済から市場経済に移行したことが知識として定着しておらず、正答②と誤答③、④のうちのどれがインドについて述べた文か判別できなかった（ゆえに誤答③、④の選択率もそれぞれ24.1%、32.4%と高い）。まずは教科書や図説資料集で扱われるレベルの基礎知識を早めに身につけることが大

切である。

第3問 日本の第3次産業・消費生活と世界の観光業知識をフル稼働して正解を推理する練習を重ね、統計図表問題の正答率を高めよう。

大問全体の平均得点率は49.2%であり、6つの大問中で2番目に低かった。問1と問2の正答率がそれぞれ30.4%、19.8%と低かったためである。問1は、社会保険・社会福祉・介護事業は事業所単位で大きな利益を生み出しにくく、正社員・正職員の比率を高められていない実態を把握出来ていなかった。問2は、消費支出に占める住居の割合が高いアを、家賃を払っている単身の勤労者世帯と考えることができず、むしろ二人以上の勤労者世帯と判断してしまう受験生が多かった（ゆえに誤答⑥の選択率が64.4%と高い）。いずれもやや難問ではあったが、知識をフル稼働して正解を推理する練習をセンター型問題集や過去問で重ね、このレベルの図表問題を確実に正解できるようになると、差をつけることができるようになる。

第4問 東アジア

この時期の地誌の大問としてはまずまずの出来だが、基礎知識はまだ不足している。

大問全体の平均得点率は54.7%であり、6つの大問中で2番目に高かった。多くの高校が系統地理を終えてから地誌を扱うため、例年、年度前半の地誌の出来はあまり良くないが、そのことを考えると、この時期の地誌の大問としてはまずまずの結果が出たと言えよう。2016年度よりセンター試験でも地誌の大問が1題から2題に増えるなど、近年、地誌の重要度は増しているの、このまま実力を高めたい。全体的によく出来ている中、問5において、郷鎮企業について説明した④の正文を、誤文と判断してしまう受験生が41.5%に及んだことが気になった。郷鎮企業は、ほとんどの教科書や図説資料集が大きく扱う重要事項である。これを誤文とした受験生は、まずは基礎知識の確立に専念するとよい。

第5問 イギリスとニュージーランド

近年出題され始めた二国を比較する地誌だが、よい結果に！ このまま力を伸ばそう。

大問全体の平均得点率は56.7%と6つの大問中で最も高かった。2016年、2017年と2年連続でセ

ンター本試に二つの国の比較地誌が出題されたが、新傾向の大問であったにもかかわらず良い結果が出た。学習を重ね、このまま得意な形式の大問とした。極端に正答率の低い問題もなく、特に地形と降雨の関係を扱った問1は思考力の必要な手強い問題であったが、まずまず高い49.3%の正答率を得られた。正解した受験生は自信を持って良い。

第6問 地域調査（大分県と宮崎県）

昼夜間人口比率を扱った統計図表や古い地形図を読む力をもっと高めよう。

大問全体の平均得点率は54.3%と標準的であったが、いくつか気になる小問があった。まずは問4であるが、山間の過疎地と考えられる小林市のグラフを力と判断した受験生（誤答①または②を選択した者）が全体の34.5%に及んだ。昼夜間人口比率が低いのは、中心地機能の強い都市に多くの通勤・通学者を送り出す郊外都市であり、都市から隔たった過疎地ではない。しっかり理解しておこう。次に問2であるが、古い水田の地図記号を荒地であるとする③を正文と判断した受験生が全体の32.8%もいた。古い水田の地図記号をしっかり頭に入れるように、第1回、第2回のセンター模試の講評でも指摘してきたが、3割以上の受験生が改善されなかった。模試は復習が重要である。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆高校地理の知識を強化するための学習法

模試の見直しで知識不足を自覚した受験生は、自然、産業、都市、地誌のように、高校地理の全分野を網羅した問題集に取り組もう。その際、教科書、図説資料集、用語集等を参考にし、完全解答を作るつもりで取り組めば、重要事項が自ずと頭に入る。

◆統計図表を読み解く力を強化するための学習法

統計図表問題を論理的に解く力が弱いと感じた受験生は、センター型問題集や過去問で練習する。その際、曖昧に選択肢を特定せず、根拠を明確にしてから正解を選び、正解以外の選択肢についても、該当する国・地域・品目等を全て特定するよう心がける。このような練習を繰り返せば、正解に至るための思考力が徐々に身につく。